

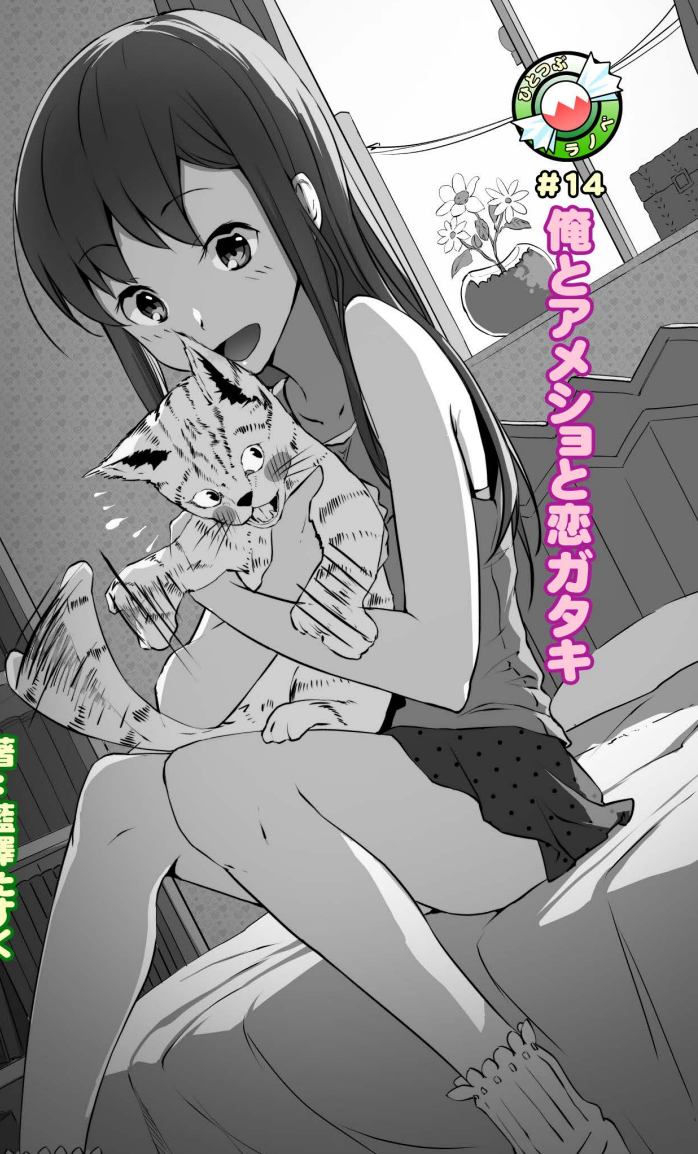


#14

俺とアメリシヨと恋ガタキ

著：藍澤たすく

イラスト：かもめ遊羽



起きたら猫になっていた。

何を言っているんだと思われるだろうが、実際言っている本人にも意味がわからない。

学校から帰ってきて、家で横になってテレビ見ながらうとうととしていて、目をあけたら猫になっていた。

……俺の頭はおかしくなってしまったのだろうか……。

とりあえず周りを見渡してみる。まったく見知らぬ部屋だ。

そして猫目線で見るとクローゼットやらベッドやらはやたら巨大で、まるでビルのような。

一体これは……。

……そうか、俺はうたた寝をして夢を見ているんだ！

夢ならなんの問題もない。

いやむしろ今の状況を楽しんだ方がお得というものだ！

意味もなく前向きになった俺はいそいそと鏡台の前に移動する。

目の前の鏡に映っているのは、確かアメリカン・シヨートヘアとかいうちょっと高級そうな猫だ。どうやらこれが今の俺らしい。

右手（右前足？）を招き猫のように上げてみると、ふさふさの体毛に覆われたぶにぶにの肉

球が目に入る。

ふに。

ちよっと押してみる。

ふに。

ふにふにふにふにふに。

ふにふにふにふにふに。

うおおおおお、これは気持ち良い！

人間の指で押したときとはまったく感触が違っ！

この名状しがたい弾力、手触り……肉球マジ最高！

しかも肉球を肉球で押すと弾力マジマジでさらに気持ち良さが倍増だぜ、ひゃっふー！

……ちよっと落ち着け、俺。夢だからってはしゃぎすぎだ。

しかし触感までこんなにリアルにある夢なんて初めてだよなあ。
以前もよく色つき音つきの夢は見てたけど（人によつては色も音もついていないことが多いらしい）、触感付きにおい付きの夢は初めてだ。

「あーっ、みいちゃん、目えーさめたのー!? 良かったー!」

突然背後にあったドアが開き、部屋に女の子が入ってきた。

と同時に、俺はダツシユでベッドの上に置いてあるふわふわのクッションの後ろに身を隠した。

だって……だって、入ってきたのは西園寺優華さんなんだぜ!? 俺が秘かにクラスで憧れてる女の子なんだぜ!? 夢だからつていきなり出てこられたら、そりゃびびるってもんなんだぜ!!

「あれ? みいちゃん、出ておいで? 大丈夫だよ? 怖くないよー?」

彼女の透き通った声が耳を心地よくくすぐる。

今すぐにでも出て行きたい……でも、同時に恥ずかしくて出て行きたくない! ああ、俺はいつたいたいすればいいんだ!?

「ふっふーん。そうかい、みいちゃんがその気ならこつちにも考えがあるわよ……。……じゃっじゃーん!」

「?」と思い、クッションからそつと片目だけ覗かせて西園寺さんのほうをしてみる。
すると彼女はなぜか誇らしげに猫じゃらしのおもちゃを掲げていた。

いや、さすがにそれは効きませんよ、西園寺さん。なんせこちとら中味は人間。そんな猫だましの……

「ほーらほーらほら〜」

ね、猫だましの……の……

「ほらほらほらほら〜」

「にゃー!!」

気づくと俺はいつの間にか猫じゃらしを追ってクツションから飛び出していた。
 なにこれ!? なにこれ、超楽しい!?

ふわふわした猫じゃらしの先っぽを追いかけるの、超楽しいんですけど!!

「はい、つかまえた〜」

「にゃっ!」

無防備に猫じゃらしを追いまくっていた俺は、いきなり西園寺さんにしっかりと抱きすくめられた。

ふんわりと漂う甘い香り。肉球よりも柔らかいこの感触は……うわあああ、いつも遠目に眺めていた西園寺さんのキラークリップじゃないか! ちなみにこの場合のキラークリップは「俺殺し」の意味な!

「うにゃ! うにゃ!」

「ほらほら、暴れないの〜」

いや、暴れたくて暴れてるんじゃないかって……なんというか、この柔らかい地獄……いや天国から逃れただけなんですけど〜!!

こ、このままだと……。

こ、このままだと、最後に残された理性さえ吹っ飛……

「あれ? まだ汚れてるね? うーん、もうちょっと洗っちゃおうか」

「うにゃ!」

俺の右手……もとい右前足についたちよつとした汚れを見て西園寺さんが可愛く眉をしかめる。

「そうだ、ついでだからあたしもお風呂入っちゃおうと〜」

「う、うにゃ! うにゃ!」

「はぁーい、みーちゃん、いらっしやーい。一緒にお風呂に入らしましょうねー」

「にゃっ! にゃっ!」

それから1時間後。

……まるで天国のような地獄だった。いや、地獄のような天国だったぜ……。
 まさに湯けむり桃源郷タイム……。

ちなみに夢とはいえ、彼女の裸を見ることに罪悪感を覚えた俺は、風呂に入られたあと
 もあがったあとでも徹頭徹尾、目をつぶっていた。

彼女の柔らかい手で全身をこしこし洗われたときも、ブラッシングで全身を梳かれたときも、

西園寺さんの手がちよつとすべてあそこに触れた時も……時も……いや、時は正直やばかったな……。

だが誓つて言おう！ 俺は彼女の裸は見なかった！ 仮に夢の中であれ、西園寺さんを汚すことは決して許されない！ 俺にとつて彼女は永遠の聖域なのだ！

……でも正直なところ、風呂上がりに抱っこされてダイニングのソファまで運ばれてきた時は夢心地だったな（実際、夢だけ）。あの肉球よりもふにふにでポリユミーなおっぱい……あれは良いものだ……いやいや、俺は何を邪まなことを考えているんだ！

急に恥ずかしくなつてソファの上でごろごろと転がった。今の状態だとただ単に猫が背中の蚤を取ろうとしているようにしか見えないが……。

（あーこの夢がいつまでも覚めずに、このままここで西園寺さんの飼ひ猫になつてもいいかな……）

俺はソファの上でだらしなく仰向けで腹を見せ、にんまりと微笑んだ。その刹那。

「いい気なもんだな、橋本美鶴よ」

「なっ!? だ、誰だ!?!」

俺はまるでバネ仕掛けの人形のように瞬時に飛び起きた。

俺の夢の中で、俺をフルネームで呼ぶるとは……一体何者!?!

「どうせ、『このまま夢が覚めなければいいのに』とか『このまま飼ひ猫ライフを満喫したい』とかふざけたことを考えてたんだろうが」

「な、なぜ俺の考えを……!? お前はエスパーか、うおっ!?!」
声のする方を振り向いて俺は絶句した。

巨大なゴルドン・レトリバーが俺を見下ろしていたからだ。

あまりの巨軀に俺は一瞬怯んでしまう。

「この夢が覚めなければいい……そう思っていた時期が俺にもありました……」

ゴルドン・レトリバーは遠くを見つめるような目でそう呟いた。

「き、貴様いったい何者だ!?!」

「忘れたのか、美鶴よ……。ならば、これを見るがいい!」

巨大犬がいきなり俺に向かって尻を向ける。そこには派手な傷跡があった。

「そ、その傷……!? お前まさか阿比留か!?!」

その傷には確かに見覚えがあった。

なぜならそれは小学校の時から親友である阿比留政美の尻にあるものとまったく同じだったからだ。

確か小三の頃だ。二人で誰もいない建材置場で遊んでいたとき、あいつが派手に転んでそのまま鉄条網に突っ込んだ時に作った割と痛々しい傷だ。

思わぬ場所での親友との再会に俺は再び言葉を失った。
しかし、待てよ。

「おい、お前、確か3ヶ月前に家出して行方不明になって両親から搜索願^{そうさつねが}が出されてなかったか?」

「家出などしていない」

「どういうことだ?」

「俺はもう3ヶ月もここで西園寺さん……いや、敢^あえてゆかたんと呼ばせてもらおうか……ゆかたんのベットをやっている!」

「なっ!」

衝撃^{しょうげき}の親友との再会よりもさらにショッキングな事実が今!

「す、するとまさか、阿比留……貴様もその……そのお風呂とか……」

「無論だ。毎日の隅々まで丁寧に洗ってもらっている!」

「なに!」

先ほどの桃源郷での幸せな記憶も忘れ、俺はただただショックに打ちひしがれた。

俺だけやなかったんや。

あの桃源郷でのピーチフルライフは俺だけのものじゃなかったんや。

……だが、待てよ。

「……開けなかったらうな?」

「なに?」

「阿比留! 貴様まさか目を開けたりしなかっただろ? 西園寺さんの裸を見たりなどはしなかっただろ?」

俺の恫喝に阿比留は犬らしくないニヒルな笑みをふつと犬面に浮かべた。

「ガン見した」

「なっ!」

「この3ヶ月の間、何度も何度もガン見したさ! 据^すえ膳^{ぜん}食^{じき}わぬは男の恥^{はじ}! ゆかたんのおっぱい最高! 美尻^{みじり}最高! わおーん!」

「て、てめええええ!!」

俺は怒りに我を忘れて阿比留に飛びかかった。

べち。

体格差は圧倒的だった。

俺はいとも簡単に阿比留の左前足に墜^おとされ、その後右前足で押さえつけられた。

「ぐふっ……て、てめえ、人間の風上にもおけねえ……西園寺さんの……西園寺さんの……俺

の聖域を土足で踏みじるとはあああああ！」

「安心しろ。今は俺は犬でお前は猫だ。風上も風下もねえ。だが同時にそこに大きな問題がある……」

「？ な、なんのことだ？」

戸惑う俺をよそに、阿比留はくわつと目を見開いた。

「つまりゆかたんにとつて、最愛のペットは『一匹で十分』ということだあああーん！」

ゴールドン・レトリバーの濃厚な犬面に似つかわぬ狼のような咆哮。

こいつ、野生に支配されかかってやがる……。人間捨てかかってやがる……。

「おい、阿比留、お前まさか……」

「ふ、悪く思うなよ、美鶴……そう、これは事故なんだ。愛犬と愛猫が戯れているうちに、たまたま愛猫の急所に俺の牙が食い込んだ……そしてたまたまお前が死んでしまったという悲しい事故なんだ……」

「殺る気満々じゃねえかよ、おい！」

馬鹿野郎、こんなところで死んでたまるか！ 俺はまだ西園寺さんのおっぱいを見ていな……じゃなかった、こんな下衆野郎に殺られたんじゃ橋本家末代までの恥ってもんよ！

「ふん！」

「うおっ!？」

阿比留の顔が苦痛に歪む。

「み、美鶴、お、お前……!？」

俺は奴の右前足に押さえつけられたまま、その第一関節を極めてやった。

まさか人間と同じように極まるとは思ってなかったが、奴の表情からするに予想以上のダメージを与えられたようだ。

「そうか、お前少林寺の有段者だったな……油断したぜ……猫になっても相変わらず恐ろしいやつ……」

阿比留は右前足をかばいつつ、びっこをひきながら素早く後退した。

「どうする？ このまま尻尾を巻いて負け犬になるか？」

「冗談言うな。ゆかたんの寵愛をこの一身に受けるまで俺は戦いをやめない！ やめるわけがない！」

「お前ならそう言うと思ったぜ！ いいぜ、かかってきな！ ただし、今度は死ぬ覚悟でな！」

「わおわおわおーん！」

「にゃあああーん！」

それから1時間。俺たちは死闘を繰り返した。

そう、それはまさに「死合」と呼ぶに相応しい壮絶な戦いだった。

「はあ、はあ、はあ、いい加減まいったといいやがれ、このくそ犬……」

「はあ、はあ、はあ、お、お前こそ自慢の毛並みがずたずただぞ、このくそ猫が……」

そこにいたのはもはや高級なベットとして人気のあるアメリカンショートヘアとゴールデン・レトリバーなどではなかった。

己の尊厳のために(？)死力を尽くして戦ったばら雑巾のような漢たちの残骸だった。

やがて俺たちはまたよろよろと立ち上がった。

体力はとうに使い果たし、双方とも気力だけで立っている状態だ。

(次で勝負が決まる……)

俺も阿比留も、そう直感した。

先に動くべきか、それとも後の先をとるか……。

緊迫した空気が部屋に張り詰める。

その時だった。

びんぼーん。

やけに明るい呼び鈴の音がした。

「はーい、今行き……きやーっ！ 貴史くーん!?」
がたっ。

いつになく明るい西園寺さんの声を聞いて、俺たちは瞬時に窓ガラスに張り付いた。

眼下にある玄関先には、見るからにイケメンの優男に抱きついている西園寺さんの姿があった。

「いつ日本に帰ってきたのー!? 連絡ぐらくれればよかったのにー!」

「ふふふ。この方が優華も喜ぶと思ってさ」

「んもうー、貴史くんはいじわるー! でもほんと嬉しい! さ、入って入って! 久しぶり

にあたしの手料理ご馳走してあ・げ・る♥」

しっかりと腕にしがみついて優男を家に引き入れる西園寺さん。

その生き生きとした笑顔は、まさにフォーリンラブのそれだった。

階下からきやつきゃつうふと楽しそうな声が聞こえるが、その正体を確かめる気力も体力も、もう俺たちには残されていなかった。

ただ二人並んで窓の外をぼーっと、抜け殻のように眺めるのが精一杯だった。

「なあ、阿比留よ……」

「なんだよ……」

「早く二人で人間に戻る方法、見つけような」

「……………」

「泣くなよ」

「な、ないてなんか……ないてなんか……ああああ……ああーん、ああおおーん！」

「にゃおおおーん！」

その日、街には夕陽ゆうひに慟哭どうくするような遠吠とおほえがいつまでもいつまでも響ひびき渡わたったのだ
た……。

おしまい